「『愚かな金持ち』のたとえ」　2023年07月26日

そこで、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らし、やがて言った。『こうしよう。倉を壊し、もっと大きいのを建て、そこに穀物や蓄えを全部しまい込んで、自分の魂にこう言ってやるのだ。「魂よ、この先何年もの蓄えができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。」』しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』自分のために富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ。」（ルカ12：16～21）

主イエスは民衆から深く信頼されていた。ある時、群衆の一人から「先生、私に遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」と声をかけられた。旧約聖書ではモーセをはじめ、長老たちは遺産相続をめぐる争いを調停していたように、尊敬する主イエスに、その役を依頼したのである。彼は親が死に、兄弟間で相続争いをしていたが、不利に扱われていることを不満に思い、主イエスに助けを求めたのである。主イエスは彼に、「誰が私を、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」と、地上の損得を調停する裁判官ではないと言われた。そして、集まっていた群衆に向かって、「あらゆる貪欲に気をつけ、用心しなさい。有り余るほどの物を持っていても、人の命は財産にはよらないからである」と言われた。この主イエスの言葉から、兄弟間での相続争いの調停を求めた人は、相当の金持ちであったことが想像される。彼は十分な財産を持っていたが、なお、親からの遺産分配は不公平であると思っていた。それを見て、主イエスは人の命は持ち物とは関りがないと言われたのではないか。ここで、主イエスは一つのたとえ話をされた。

「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らし、やがて言った。『こうしよう。倉を壊し、もっと大きいのを建て、そこに穀物や蓄えを全部しまい込んで、自分の魂にこう言ってやるのだ。「魂よ、この先何年もの蓄えができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。」』」ある地主の畑が豊作で、多大な実りを得た。彼は、今までの倉では納め切れないので、もっと大きな倉を建て、収穫した穀物や蓄えをしまい込んでおこうと考えた。そうすれば、何年先までも食べられるほどの蓄えができる。何の心配もなく、食べ飲むことができる、大いに楽しめと自分自身に言い聞かせた。彼は豊かさの絶頂にある。ところが、主イエスは続いて、「しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』」と言われた。愚かな者よ。命は神が支配しておられる。豊かさの絶頂に立って歓喜しても、今夜、神がお前の魂を取り上げられる。そうすると、大きな倉を建てて、蓄えた穀物は誰のものになるのか。財産を持って、天に帰ることはできないので、蓄えたものは、他の人のものになる。お前の喜びは何と空しいことか。そして、「自分のための富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ」と言われた。いくら、富を積み上げても、その富を神のために、即ち、苦しむ隣人のために用いないならば、この愚かな人と同じである。

貧富の格差が限りなく大きくなっている現代、富が神のために用いられることが世界の救済となる。軍事に費やされている金額を用いれば、世界から餓死者はいなくなり、温暖化防止にも十分な効果をもつ政策が講じられるであろう。人間の愚かさと罪深さを思う。